

黒瀧秀久著

『弘前藩における山林制度と木材流通構造』

脇野 博

国土の六七%が森林で、しかもその四一%は人工造林による植林地であるという現在の日本は、世界有数の森林国であり人工造林国である。それゆえ、外国人の目には今日の日本には緑があふれていると映り、そして高度に工業化した日本で緑があふれているのはなぜなのかという問いかけとその説明が、やはり外国人研究者によって取り組まれてきた。その代表的な著作は、コンラッド・タットマン著（熊崎実訳）『日本人はどのように森をつくってきたのか』（築地書館、一九九八年）であろう。また、最近話題になっているジャッレド・ダイアモンド著（楡井浩一訳）『文明崩壊 滅亡と存続の命運を分けるもの』上・下（草思社、二〇〇五年）も近世日本の持続可能な森林管理に注目している。

一方、世界遺産である白神山地のブナ林など、日本人の日本の森林への関心は年々高まってきてはいるものの、日本の森林がどのように形成されてきたのかということへの関心は今一つ低迷しているように思われる。とりわけ、林業史研究が低調であることはそのことを裏づけている。なぜなら、森林は人類にとって太古からの資源であり、その資源を人間が開発・利用すること＝林業という行為を抜きにしては、森林のあり方を把握することはできないからである。したがって、資源問題の観点からにせよ、環境問題の観点からにせよ、日本の森林の現状を理解し、今

後の森林のあるべき姿を考えるためには、林業史研究の進展が不可欠である。

こうしたなかで、日本人の手になる林業史研究のまとまった著作として久々に刊行された本書は、まさに時宜を得たものであり、日本の森林形成過程の解明を前進させることになる。本書の構成は、次のようである。

はじめに

本書の課題

序章 弘前藩政の確立過程

第一章 弘前藩における山林制度

第一節 森林地帯区分

第二節 山林制度区分

第三節 山林の職制と組織

〔付説〕今日から見る江戸時代の経済社会的位置と森林の持続的

利用の位相

第二章 全国市場の形成と木材市場

第一節 幕藩体制下の商品流通と木材

第二節 全国市場と江戸・大坂木材市場

第三節 日本海海運と秋田山開発

第三章 津軽西浜通りからの木材移出

第一節 弘前藩における海運と木材移出

第二節 加賀藩における津軽地方からの木材調達

第三節 津軽西浜通りからの木材移出

第四節 林業生産の展開と山林所持の進展

〔付論〕御救山制度の歴史的意義について

第五節 藩政末期における津軽深浦湊の材木船入津状況

第四章 大坂北国材木問屋と木材流通

終わりに

本書は、これまでの林業史研究において「領主的林業地帯」と規定された弘前藩の木材生産の分析を通じて、近世の木材流通構造、採取林業から育成林業への転回という林業生産構造の変貌及び林野所有の端緒的形成過程を明らかにしようとしたものである。

まず、木材流通については第二章において、近世都市の膨大な木材需要を前提として、幕藩制的市場編成のもとで江戸と大坂を中心にした木材全国市場が形成され、全国市場に向けて津軽・南部・秋田を始めとする東北地方の天然林も相次いで開発され移出されるという近世木材流通の基本構造が示される。そして、この木材流通を支えたものは海運であり、特に秀吉による秋田山からの「太閤板」回漕による搬出は、日本海海運を活性化し東北日本海沿岸地域を上方と強く結びつけるとともに、この地域の領主が木材商品化を直営で試みるという契機を生み出したことを著者は示した。

そして、第三章では「太閤板」回漕が弘前藩の木材商品化と移出を刺激したことが指摘される。弘前藩は近世においても全国有数の木材生産地帯であったが、その全国市場に向けての木材生産成立過程については不明なことが多かった。しかし、著者の右の指摘はこの成立過程解明の鍵となると思われる。また、同章では加賀藩が津軽地方

から木材を調達していたことも紹介され、弘前藩の木材が江戸や大坂だけでなく他領へも移出されていたことがわかり、弘前藩の木材が名実ともに全国市場向けの商品であったことを知ることができる。このように、近世に発展した弘前藩の木材生産と移出の実態を、著者は第三節において具体的に明らかにした。とりわけ、同節では商人請負による木材生産の実態が詳細に説明されており、今まで藩の林政や林野制度の範囲でしか把握できなかった弘前藩における木材生産・流通構造が明らかになったことは画期的である。

さて、一七世紀後半に至ると木材生産増大に伴う乱伐により、弘前藩内の森林資源は枯渇する。第三章第四節においては、この枯渇に対する藩の対応に言及し、藩が伐採制限とともに造林に着手し、特に天和年間から始まる人工造林である大規模な植林が紹介され、弘前藩の林政が採取林業から育成林業に転換したことを著者は指摘する。そして、こうした育成林業のもとで、領民が自費栽培の許可を得て植林し伐採できる御抱山制度が生まれ、この売買譲渡が可能であったとされる御抱山が農民による山林所持の端緒になったのではないかと著者は述べている。

本書は、これまで明らかにされることがなかった弘前藩の木材生産・流通構造の実態に光をあてるとともに、今後の弘前藩、さらには日本林業史研究の深化に向けての材料を提示した。と同時に、これまでの日本林業史研究で議論されてきた学説についても問題提起をしている。それは、すでに長谷川成一氏が『東奥日報』の本書の書評（二〇〇五年九月二十日付朝刊）においてすでに指摘されているものでもあるが、西川善介氏の学説への批判である。西川氏は弘前藩の林業生産を「領主的林業

地帯」に分類するが、著者は西川氏の「領主的林業地帯」の規定が弘前藩には妥当であるかを問うている。その規定とは、木材の伐出販売が原則として領主の資力で行われ、近世中期以降はその伐出も停滞するというものである。著者は、本書において明らかにした以下のこと、即ち弘前藩では木材伐出が多くの場合商人資本によってなされていたこと、近世中期以降も伐出が停滞したとは言い難いことをもって、右の西川氏の規定は弘前藩にはあてはまらないと主張する。

この主張については、評者も同感である。評者も以前、近世中期以降に実施された萩藩の輪伐である番組山について検討したことがあるが、萩藩は財政上の理由から木材伐出を最優先し、一種の伐出制限でもあった番組山は実質的には機能しなかったことが明らかに、西川氏のいうところの近世中期以降の伐出停滞というところえ方に疑問を感じたことがある。今回、著者が西川氏の学説に疑問を提出したことにより、「領主的林業地帯」の概念を再検討する機会が得られたことになり、著者は今後の再検討の深化を期待したい。

最後に、右の「領主的林業地帯」の規定とも関わるのであるが、近世における育成林業について一言述べておきたい。著者は第一章の「付説」において、近世中期の採取林業から育成林業への転換が、持続可能な森林の造成と利用を実現し、現在の津軽半島のヒバ林や白神山地のブナ林が枯渇することなく継承されていると述べている。そして、このような「江戸時代における循環型社会の意義」に賛意を表明しておられるように思う。しかし、評者は最近、循環型社会としての江戸時代、環境先進国江戸、といったとらえ方に疑問を感じている。確かに、森林枯渇

に対して幕藩領主は育成林業策を実施し、伐採制限や植林を行った。しかし、本書でも紹介されているように、弘前藩では幕末まで過伐↓荒廃↓復興を繰り返したのであり、また萩藩の輪伐が機能しなかったことからわかるように、森林資源利用においては自然との共生などという思想はなく、あくなき森林資源の収奪が基調であった。育成林業は収奪するための施策であり、そして伐出技術の限界から開発できない森林が残されたために日本の山は禿げ山にならなただけである。それゆえ、近代になると林業技術の近代化をもって、近世には開発できなかった森林の開発が国家的要請になったのである。

笠谷和比古氏は「徳川時代の開発と治水問題」『日本の科学と文明―縄文から現代まで―』同成社、二〇〇〇年）において、「日本人はその本質的な性格において自然に対する畏敬の念が強く、自然を保護する心がことのほかに厚かったと、今日一般に唱えられている言説に対して疑義を生起させる」（一三九頁）と述べている。評者も同感である。近代以降の日本におけるすさまじいまでの開発と自然破壊は、近代日本の産物なのであろうか。それこそが、近代以前からの日本の伝統ではなかったのか。こういった日本人の自然観のことも含めて、前近代日本の林業史のさらなる研究深化が望まれる。著者の今後の研究に期待したい。

（A5判、一七七頁、北方新社、二〇〇五年八月、一八〇〇円）

（わきの・ひろし 秋田工業高等学校教授）